

来年四月の道知事選まで残り一年となった。報道によれば、現職の高橋はるみ知事は、すでに出馬の意向を周囲に伝えているという。仮に当選すれば四期十六年の任期がほぼ保障され、道政史上例のない長期政権となる。

高橋知事は初出馬のときから「落下傘」のイメージが強かった。富山県出身の元経産官僚。就任後も「知事を辞めれば東京に帰る人」という陰口が絶えなかった。一時期、札幌市内に自宅マンションを購入するという話も流れたが、結局は公邸住まいを続けている。

それだけに、ということなのだろうが、道知事としては異例の四期も続けたいとの執念が「意外に思えた」という声を複数聞いた。

実は、高橋知事の北海道との縁は、道経産局長を二年弱勤め、元財務官僚の夫が札幌出身というだけではない。

母方の祖父で、後に富山県知事を務めた内務官僚の高辻武邦氏が戦前、道庁に勤務していたことがあるのだそうだ。高橋知事の後援会のホームページを見ると、その時代、知事の母は札幌の女学校に通っていたらしい。

その中で知事は「私の家族には道産子としてのDNAが伝わっているのかもしれないね」とさりげなくアピールしている。知事にとっても「よそ者」との陰口は、いやが応でも意識せざるを得ないものだったのだろう。

ただ、もともと明治以降に移住してきた

## 「道版・議院内閣制」の行方

人が多い北海道で、政治家だからとはいえず、地元出身か否かを問いつけるのはおかしな話だ。オープンな道民の気質らしくもない。

「よそ者の目」が地域に刺激を与えることもある。知事にとつて問われるべきは、地元意識の強さではなく、多選と言われようとも情性に流されずに変革し続けるエネルギーがあるか、ということだろう。

よそ者で思い出すのは、霞が関から道庁に派遣されていたある官僚の述懐だ。いわく、「北海道はすごいところだ。この議会と道との関係はほとんど議院内閣制だ。全国でもこんなところはほかにないのに、だれも不思議に思っていない」。

もちろん、彼は比喩的に話している。ここの言葉の定義は厳密ではない。

当たり前だが、北海道も他の都府県と同じく、知事と議員は、住民がそれぞれ直接選挙で選ぶ「二元代表制」だ。知事は、首相のように議会の多数派から選ばれたわけではない。つまり「議院内閣制」ではない。議長と地方議会は、互いに監視し合う緊張関係にあり、制度的には与党も野党もないはずだ。

それなのに、道議会の「与党」を自任する自民党と、知事以下の道庁側の結びつきが異様に強すぎるというのが彼の指摘だ。

道の幹部は、政策づくりの最初の段階から、「与党」道議の自民党幹部に、「ご意見を伺う。その後も水面下で、何度もやりとりを繰り返して、自民党会派の政審委員会や自民党道連の政調会にその経過を説明していく。

これは、自民党が国政でやってきた政府提出法案の事前審査の仕組みと似ている。党が承認しなければ全てが何も動かない。

道議会が「三二国会」と揶揄されるゆえんだ。道庁では、高橋道政だけでなく、歴代知事が似たようなことを繰り返してきたと言われる。

自民党道議が「与党」として「自分たちの知事」の道政運営に強い責任感を持つのは悪いことではない。行政を安定させるため、入念な調整作業が必要ということもあるだろう。しかし、この独特の関係性が知事の大胆な決断を阻害していることは間違いない。丁寧に「説明」を繰り返すうち、あらゆる政策はカドが取れ、丸みを帯び、面白みのないのつべらぼうになる。

こうした関係性は多かれ少なかれ各地の自治体で指摘されることだ。ただ、道の実情は極端なのだ。象徴的なのが、道議会のあしき慣例である一言一句まで詰める答弁調整だ。議会が開かれた時にはすべてが終わっている。表の議論は台本のせりふを読むようにしてスムーズに進んでいくが、それと裏腹に実際の道政はどんどん硬直化していく。

やはり「北海道版・議院内閣制」の指摘は皮肉が効きすぎていた。健全な姿に戻すべきだ。高橋知事がどうしても四期目をやりたいのなら、それこそ「よそ者」の視点で改革すべきテーマではないか。道政奪還を狙う民主党にとつても等しく重要な課題であるはずだ。

△由▽